安曇野市無形民俗文化財（候補）

岩原山神社のお舟祭り

◆伝承地 ／ 安曇野市堀金岩原 山神社
◆実施日、上演日、開催日等の期日 ／ （新暦）4月 23 日（土）・24 日（日）
◆無形民俗文化財が行われる祭りや行事等の名称 ／ 山神社の舟祭り
◆実施場所 ／ 岩原の舟張り場 ― 舟頭石（渡し場・栗尾道入り口） ― 山神社

由来

①山神社は穂高・牧に祀られた神を現在地に祀ったと言われている。
②近隣の入会村 23 ヶ村の神として祀られた。
③昭和 38 年（1963）に岩原（いわはら）の氏神となる。
④祭りは、かつては山元の岩原（いわはら）、上堀（かみほり）、下堀（しもほり）、が主催し、準山元の田多井（たたい）、田尻（たじり）は客分として参加した。
⑤かつては岩原と上堀が一緒に舟を担いだ。後に岩原が舟張り、幟立て、灯籠を準備し上堀と下堀が隔年に舟を担いだ。
⑥岩原の氏神になってからは青年団と消防団が担いだ。
⑦こども舟を平成 9 年（1997）から作るようになる。
⑧舟張り場は現在、県道と市道の交差点横であるが、かつては山口家（現在の山口裕氏宅）で材料、道具を保管し、山口家前の広場で作った。
⑨明治 30 年（1897）頃は裸で舟を担いだ。

概要

（1）舟作り

舟は車輪を付けない担ぎ舟で、祭り2週間前に舟張り場で骨格を作る。

①一間ほどの立方体のヤグラを組み立てる。
②ヤグラの上部左右に太い腕木を付ける。
③ヤグラの前後斜めに刎木（はねぎ）を付ける。刎木の先端に檜やサワラの葉付きの柴を舳先側は3段、艪側は2段に付ける。刎木や柴は区林から調達する。
④先端の柴から太い縄を舳先側は3本、艪側は2本たわわに垂らしヤグラに繋げる。これは舟形にするためである。
⑤幕張りは祭り当日に行う。舳先側は横縞の紫、緑、赤、白、黒、艪側は緑、紫、赤、白、黒の幕を張る。ヤグラ部分は幕を張らない。

（2）祭り

①舟張り場へ氏子総代が迎えに行き、氏子総代、育成会長、こども舟、保護者会長、氏子総代、保存会長、親舟の順に出発する。
②こども舟の前には数人の太鼓、親舟はヤグラに付けた太鼓を乱打し担ぎ手を鼓舞する。
③舟頭石（せんど）（渡し場、栗尾道入り口）を右回りに3周し、山神社へ向かう。途中何回も休む。
④御布令石（おふりょういし）の前に舟を安置する。
⑤神事終了後、担ぎ手はお祓いを受ける。
⑥神名幟（牧村大明神）、氏子、区長、こども代表、舟の順に御布令石を3周する。こども舟は下げる。
⑦御布令石を3周した後、そのすぐ下の坂へ舟を横倒しにして転がす。天地がひっくりかえり腹の部分が上になることが多い。
⑧入り口の幟旗付近から県道へ数回転がり落とす。刎木は折れ、舟形の幕はくしゃくしゃになり、ヤグラと腕木の骨格だけになる。
⑨ヤグラと腕木だけになると、担いで船張り場へ行き、1拍手で終了となる。

伝承組織

保存会名 ／ 岩原祭典保存会
所在地 ／ 安曇野市堀金烏川（岩原）
代表者名 ／ 小池 勝 （平成 23 年度）

伝承組織の現状

昭和末までは青年団（豊葦連）が実施してきたが、若者の数が減ってきたため、農家の青年組織「岩原親交会」（20～50 代までの男性）を

作り、祭り時には「岩原親交会」が「岩原祭典保存会」として、平成3年（1991）から祭りを行っている。

現在は「岩原祭典保存会」100 人ほどが祭典を行っている。

文化財価値についての特徴・所見

①安曇野市では山神社の舟が現在唯一の担ぎ舟であり、貴重な祭り舟である。

②穂高神社の船は、かつては担ぎ舟であったが、天保年間に車輪を付け曳き舟にした（青木 1988）。このことから担ぎ舟は曳き舟の前の形態である。

③担ぎ舟のルーツは諏訪大社・下社の舟である。この舟はかつて東堀村（現岡谷市）の正八幡宮（柴宮）の柴で作られ、柴舟と呼ばれた。柴舟のヤグラの上には諏訪大社の神の人形が飾られる。下社から山神社へ伝わってきたのは時間的、距離的に離れているので、柴が少なく、人形飾りが省略されたものと思われる。

④下社では明治 25 年（1892）頃まで舟を裸で担いでいた。山神社では明治 35 年（1902）頃から裸で舟を担いでいた。裸で担ぐことは下社から山神社へ伝わってきたものと思われる。

⑤舟頭石の場所は栗尾道（くりおみち）の入り口であり、渡し場でもある。山神社の神を烏川から引き揚げた場所と言い伝えられている。その場所を舟が通ることは舟が依代になることではないか。

⑥神名幟（牧村大明神）を先頭に榊を持った氏子、区長、こども代表の列の後舟が御布令石を回る祭りの行列の様は山神社らしい表現である。

⑦祭りの最大の見せ場である舟の転がしは、祭りの最後の行為である。舟の形からヤグラと腕木の骨格にすることは、依代としての舟から神が烏川を治めるためにいっていただく姿であると地元で言い伝えられている。言い換えれば、祭りが終わり神に帰っていただく行為である。

⑧諏訪大社・下社の柴舟を中心とした一群の担ぎ舟の特徴は、柴を多く用いる、人形を飾る、幟、槍の行列をつくり舟が続く、太鼓を乱打する、最後に壊す、という点が挙げられる。山神社の舟祭りをみると柴が少ない、人形が無い、幟、槍の代わりに榊を持った氏子の行列の後に舟、太鼓を乱打する、最後に壊すという特徴がある。柴が少なく、人形が無い以外は下社と同じである。塩尻峠を越え、梓川を渡ってきたが、下社より遠く離れ、時間的にも大部たってから伝わってきたのではないか。それにしても安曇野市内では曳き舟が多いが、ここ山神社だけは担ぎ舟の伝統を守っているのは貴重である。

記録類

文書記録	なし
映像記録	なし
録音記録	なし

◆参考文献

青木治　1988『穂高神社とその伝統文化』穂高神社社務所

堀金村村誌編纂委員会　1992『堀金村誌』堀金村誌刊行会

三田村佳子　2009『風流としてのオフネ』信濃毎日新聞社

調査

調査日	平成 23 年 4 月 10 日（日） 平成 23 年 4 月 17 日（日） 平成 23 年 4 月 24 日（日）
調査者	山口裕、西牧尚人
調査表作成	西牧尚人

※ヤグラの角材を数本残して盗まれてしまい、急遽補給して祭りに間に合わせた。本年度の骨組作りは 4 月 17 日に行った。